

神田外語大学紀要第 29 号
抜刷 2017 年

The Journal of Kanda University of International Studies Vol. 29 (2017)

日本語ライティングセンター
-2010年度からの活動を振り返って-

西 菜穂子

日本語ライティングセンター —2010年度からの活動を振り返って—

西 菜穂子

1. はじめに

学生の書く力を伸ばすためには、何が必要なのか。この課題に対する試みの一つとして、近年、日本国内ではライティングセンターを設置する大学が増えている。これは、大学生の日本語力不足、読み書き能力の未熟さが社会的な問題として認識されるようになったこととも関係があるだろう。

ライティングセンターは、もともと 1930 年代にアメリカの大学で、移民の子弟、家族で初めての大学進学者などの学生層に対して、ライティングの支援が必要となったことが始まりであるとされている（ボイド、2013）。その後、時代の流れや大学ごとに異なる事情により多様な形態を取り、変化を続けてきた。

神田外語大学でも、2010 年度に附属図書館内に日本語ライティングセンターが開設され、試行期間を経て、2013 年度には常設化された。常設化の契機は、神田外語大学が平成 24 年度文部科学省「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に採択されたことである。SALC (Self-Access Learning Center)、MULC (Multilingual Communication Center) という先進的な語学学習支援施設¹を持つ神田外語大学では、すでに 2003 年から SALC 内に英語対象のライティングセンターは開設されていた。しかし、外国語での書く力を伸ばすためには、日本語で書く力の養成と支援も必要であると考えられ、また、留学生をはじめ、さまざまな言

¹ 神田外語大学の自立学習支援施設。SALC は英語、MULC (多言語コミュニケーションセンター) は 12 の言語を対象とし、学生が自立的に語学を学び、異文化を体験できる施設である。SALC は 2001 年、MULC は 2008 年に開設された。

語背景を持つ学生が集まる神田外語大学では、学習支援、社会人育成の両面からその必要性が認識された。このような観点から、学習・キャリア支援の一形態として、日本語ライティングセンターが設置され、過去7年間にわたり、教員と職員が支援内容と方法を模索しながら、活動を続けてきた。そして、2017年春、新たに設立される Academic Success Center の運営により、場所も6号館に移し、より手厚い学習支援を行う施設として生まれ変わる事となった。

本稿では、附属図書館から新たな拠点へと移行する契機に、改めて日本語ライティングセンターの開設から2016年度までを振り返り、その概要を報告する。中でも特に本報告では、2015年度と2016年度の2年間のマンツーマン・ライティングの利用状況に焦点を当てて検討することにより、センターの課題と今後の展望について考えてみたい。

2. 日本語ライティングセンターの概要

2-1. 日本語ライティングセンターの歩み

日本語ライティングセンターは、2010年、神田外語大学7号館1階、附属図書館内グループ室の1室で、日本語文章相談（現在はマンツーマン・ライティングと改称。個別相談）、日本語文章講座（現在はライティング・ワークショップ。6回の講座）を行う機関として誕生した。

初年度は週2日、2011年度、2012年度は週3日、試験的に開講され、2013年度からは図書館内の1室に常設化された。常設化に合わせ、平日午後の3限と4限は必ず1名以上は講師が常駐して、支援活動を行うように時間割を設定した。また、センターの存在をより広く知ってもらうため、2014年度には図書館ホームページ内に日本語ライティングセンターのページを開設した。

2017年春からは、施設を6号館に移して、よりアカデミック支援に特化した活動を行う事となった。

2-2. 図書館内の施設とその運営

2016年度まで使用していた図書館内施設は、個別相談とワークショップを行うため、8名程度が着席できる机と椅子があり、ガラス張りで、外からセンター内の様子を見ることができた(写真1)。センターは専任講師1名(筆者)の個人研究室を兼ねており、センター奥の講師が使用するスペースには、本棚、PC、プリンタなどが置かれていた。その他、ホワイトボード、貸し出し可能なライティング参考図書が入った可動式ブックトラック、文房具などがある。また、センター前にはセンターでの支援の内容やスケジュールが分かるように、ポスターが掲示されていた。

センター専任以外の講師が担当する場合には、センター隣のグループ室も使用した。このグループ室もガラス張りの部屋で、8~10名程度が着席できる机と椅子、ホワイトボード、PC、プロジェクター、スクリーンなどが常備されていた。

センターとグループ室は、ガラス張りであることのマイナス面として、外からの視線が気になり集中できないと述べる学生もいた。しかし、外からの視線は中での活動により緊張感も与えられられており、また、センターでの活動を知るきっかけとなる効果もある。さらに、学生と講師が1対1になる支援活動で起こり得るハラスメント防止対策となる、などのプラス面も大きいと思われる。

利用予約や広報活動などの運営は、図書館職員が行っていた。マンツーマン・ライティングの予約は、利用を希望する学生が図書館サポートデスクに直接来て予約表を確認し、希望時間帯にサインアップする方法を採っていた²。

ライティング・ワークショップについては、学期始めに説明会を行い、定員を上回った場合には抽選を行い、受講者を決定した。広報活動としては、新年度ガイダンスでの告知、前期・後期のはじめに行う説明会、その他、ポスターやホームページの更新と管理などがある。

² 2017年度からは、Web予約を導入する予定である。



写真1 附属図書館内の日本語ライティングセンター外観

2-3. 担当講師

2010年の開設から2012年度までは、学期によって異なるが、非常勤講師1~4名がセンターでの活動を担当していた。

常設化された2013年度には、専任講師1名が着任し、13年度、14年度は専任講師1名と非常勤講師1名の体制で、マンツーマン・ライティングとライティング・ワークショップを行った。専任講師は、日本語教育、第二言語でのライティング研究が専門であり、非常勤講師は元新聞記者で、学部生に対するキャリア教育関連の講義担当（当時）であった。2名の講師の専門や経歴を考慮し、基本的に、レポートや論文などのアカデミックな文章の相談や講座は専任が、キャリア関連の文章の相談と講座は非常勤講師が担当するとHPなどで告知していた。しかし、実際には2名とも、学生が持参したどのような文章に対しても相談に乗り、支援を行っていた。

2015年度以降は、留学生別科の専任講師にもマンツーマン・ライティングの担

当をお願いしている（2015年度2名、2016年度4名）。利用学生は、日本語母語話者だけではなく、留学生やささまざまな言語背景を持つ学生も多いことから、外国語としての日本語を教える留学生別科教員の協力が欠かせないものとなっている。また、利用者増、施設移転に伴い、2017年度からはセンター専任講師1名が増員される予定である。

2-4. 活動内容

2-4-1. マンツーマン・ライティング

マンツーマン・ライティングは、1回30分の予約制で、学生と講師が1対1で対話を重ねながら、よりよい文章作成ができるような気づきを促し、アドバイスを行うライティング支援活動である。「文章を添削する」のではなく「書き手を育てる」ことに重きを置くという理念は、1980年代にアメリカで始まった **Writing as a process** 運動の影響から、日本国内の多くのライティングセンターでの理念とも深く結び付いている（飯野・稲葉・大原、2015; 佐渡島、2013）。**Writing as a process** とは、ライティングは実際に書き始める前から始まっており、構想から書き終わりまでのプロセスの中で、自分で自分の文章を読み返したり、他者から意見をもったりしながら、複数の視点を取り入れて書き進めることで、よりよい文章が作り上げられていくという考え方である。つまり、出来上がった文章のみを見る指導ではなく、執筆プロセスを重視するという姿勢を採る。

本センターでも、執筆プロセスのどの段階で相談に来てもよいとHPやポスターで告知している。例えば、「課題が出たのだが、何から始めてどのように執筆を進めたらよいか分からない」など、執筆の計画段階で来室する学生も多い。また、「とりあえず書き終わったのだが、そのまま提出するのは自信がない」と完成間近の段階で来る者、「今日提出なのだが、まだ仕上がっていない。とにかくここまで何かコメントが欲しい」などの駆け込み組もいる。

来室した学生は、まず、30分のセッション冒頭の数分をかけて、ウェルカム

シート（資料1）に記入する。シートには、学生の基本情報（学籍番号、氏名、学科／専攻・学年）を確認し、利用回数、相談したい内容、提出先、締め切り、制限時数、書式、現在の執筆段階（構想中・アウトラインができた・書いている途中・ほぼ完成）、解決したいこと、今の気持ちを書いてもらっている。学生にとっては、シートを書くという行為によって、相談したい内容や執筆計画について、相談前に考える時間ができ、相談内容が明確化、焦点化されるという効果がある。

その後、講師と30分のセッションで何をどこまで進めるかという目標を共有し、対話を通じてよりよい文章作成を目指す。1回のセッションで書き手の抱える課題が解決しそうにない場合、または、締め切りに向けて長期的な計画を立てる必要がある場合には、今後の執筆計画を立てるサポートも行う。適宜、ライティングについての参考書や資料を推薦する場合もある。次のセッション時間帯に予約が入っていない場合は、延長も可能である。

セッション終了後、担当した講師は、ウェルカムシートの裏面にかかった時間、相談内容、セッションでの目標、問題点、セッションで行ったこと、その他気づいたことを記入してファイリングし、講師間で共有している。このことにより、講師はセッションを振り返って、今後の相談に活かすことができるだけでなく、再度来室した学生を別の講師が担当した場合も、前回セッションの様子を知ることができる。

学生が相談に持ち込む文章は、大きく分けるとアカデミックな文章とキャリア関連の文章に分けられる。レポートや卒業論文などのアカデミックな文章作成、エントリーシートなどのキャリア関連の文章作成のどちらにおいても、講師は学生との対話を通じて、各自が抱える問題を整理したり、解決したりできるように試みている。その過程で、学生が目の前にある「書く課題」だけでなく、自分自身の学習に対する取り組み方や、今後のキャリアについての計画をより深く考えるようになり、最終的には自立した書き手として育っていくことが目標である。

これまで持ち込まれた主な文章は、レポート、卒業論文・卒業制作、リアク

ションペーパー、ポスター、外国語を日本語に翻訳した文章、プレゼンテーションの原稿、留学志願書、日本語パートナーやトビタテ留学 JAPAN の志望書、編入関連書類、教員採用試験・公務員試験・編入試験の論文の練習、履歴書、エントリーシート、自己 PR、インターンシップへの応募書類、サークルや委員会の企画書・報告書などがある。よりプライベートなお礼状、友人との LINE のやりとりについてなども挙げられるが、実際にはさらに多岐にわたっている。

また、来室した学生の中には、はじめはライティングの問題について相談しているが、対話を重ねるうちに、実はライティング以外に悩みや問題点があると本人や講師が気づく場合もある。ライティングセンター以外でのサポートが必要と感じられた場合は、適宜、他部署へ行ってみるようアドバイスもしている（メディカルセンターでのカウンセリング、キャリア教育センター、学内各部署など）。

2-4-2. ライティング・ワークショップ

ライティング・ワークショップは、レポート・論文コース、社会・就活コースに分かれ、少人数での 6 回完結コースを前期・後期各 1~2 回行っている。レポート・論文コースでは、レポート作成の基礎を指導するとともに、1600 字程度の短いレポートをテーマ設定から執筆まで、参加者や教師との対話を重ねながら行うことを目標としている。社会・就活コースでは、新聞記事などを題材にし、社会に対する問題意識を高め、就職活動などで必要な知識や教養を高めるようコース設定がなされている。

2012 年度に図書館が行ったアンケートでは、「文章作成の初歩的なところを教えてもらえた」、「記事や新聞の読み方と時事問題のわかりやすい解説が参考になった」との声があった。

2-4-3. 講演会

その他、センターの周知、学生の時事問題に対する啓蒙を目的として、2010

年～2014年に富澤昌美講師による時事講演会を6回開催した。また、2015年には学生の司会により、筆者と富澤講師でライティングに関する対談を行った。これらの概略については、資料2に示す。

2-4-4. 2010年度以降のセンター利用状況

2010年度から2016年度ののべ利用件数を表1に示す。

2013年の常設化以前は開室が週2～3日で、学生の空き時間とセンターの開室時間が合わず、利用できないとの意見が多数寄せられた。そのため、2013年度からは平日午後の3限と4限は必ずマンツーマン・ライティングかライティング・ワークショップのどちらかは開講するように時間割を組んだ。

マンツーマン・ライティングについては、教員や友人からの紹介が増え、学生の認知度が上がりつつあると考え、2013年度からは開設コマ数を増やした（1コマ90分中に30分×3セッション）。しかし、13年度の段階では、特に1・2年生から、授業時間数が多く自分の空き時間にセンターが空いていない、行きたい時間に予約の空きがないなどの声が聞かれた。2015年度からは、さらに開室時間を増やして対応した結果、2015年度は前年度のほぼ2倍の利用件数となった。

マンツーマン・ライティングは、前期のほうが後期よりも利用者が多い状況が2011年以降続いている（2013年度は同数）。前期の利用者数が後期に比べて多いのは、3つの理由があると見られる。まず、基礎演習などで初めてレポートに取り組む1年生が、アカデミックな文章作成に対して難しさや不安を感じて、センターを多く利用するためである。次に、4月～6月にかけて、就職活動や教員採用試験など、特に4年生がキャリア関連の文章を作成するにあたって、さまざまな疑問や悩みを抱えて来室するためである。さらに、後期は浜風祭（学園祭）休業期間や冬休みが学期途中に挟まれていることもあってか、前期に比べると、学生の学習に対するモチベーションが低くなってしまうことなどが理由と考えられる。

表1はのべ利用件数であるため、リピーターの利用もその都度カウントされて

表 1 利用状況の推移³

	マンツーマン	回数	ワークショップ	回数	合計
2010 前期	15	10	24	3	39
後期	28	10	26	3	54
2011 前期	71	33	23	6	94
後期	49	13	5	3	54
2012 前期	66	2 コマ/週	36	6	102
後期	57	2 コマ/週	48	8	105
2013 前期	92	6 コマ/週	40	6	132
後期	92	6 コマ/週	24	8	116
2014 前期	112	6 コマ/週	44	6	156
後期	72	7 コマ/週	15	4	87
2015 前期	256	12 コマ/週	13	2	269
後期	150	11 コマ/週	12	2	162
2016 前期	225	13 コマ/週	10	2	235
後期	194	11 コマ/週	4	2	198
合計	1313	-	324	-	1803

いる。一人の学生が複数回利用した場合を「1名」とカウントし、センターを利用した学生数を数えたところ、2015年度 141名、2016年度 125名であった。これはそれぞれ学生総数の 3.6%、3.2%にあたる。この数値を多いと見るか少ないと見るかは意見の分かれるところかもしれないが、2004年に設置され、国内でライティングセンターの先駆的役割を果たしている早稲田大学ライティングセンター

³ 2010～14年は、図書館での予約受付数を記載。実際には、予約なしにセンターを訪れる学生も多く、予約なしに飛び込みで訪れる学生や、時間外の利用者がいた。2015年以降は実際にセッションに参加した人数を記載。

でも、利用者実数は学生数の約3%である⁴ことを考えると、利用率は決して低いとは言えないだろう。SALCやMULCなどの施設で、自らの人的・物的リソースを見つけ、学習を自立的に進めていくことに慣れている本学の学生は、学習機会を逃さず活用する術を身につけている者も一定数存在するのではないだろうか。

一方、6回完結のワークショップについては、とくに後期は申込者数が少なくなってきた。申込者数の減少には、マンツーマン・ライティングのコマ数増にともなって、開講数を減らしたこと、マンツーマン・ライティング中心に広報活動を行ったことも関係していると思われるが、ワークショップの実施時期、方法、内容などを2010年度以降、ほとんど変えていないことも理由であろう。履修単位外の活動であるライティングセンターで行うワークショップは、どのような役割を果たすべきか、どのような活動が学生のライティング力の向上につながるのか、改めて考えるべき時期に来ていると筆者は感じている。

3. マンツーマン・ライティングの利用状況 (2015年4月～2017年1月)

前章で2010年からの利用状況を概観したが、本章では特に、センターのメインの活動であるマンツーマン・ライティングについて、2015年前期から2016年後期の過去2年間の利用状況に焦点を当てて見ていく。なお、以下の情報は、学生が予約時に記入する予約表と、入室した時に記入するウェルカムシート(資料1)の情報をもとにしている。

3-1. 利用件数

図1は、2015年4月～2017年1月の月ごとの利用件数の推移である。この間にのべ824件の利用があった。

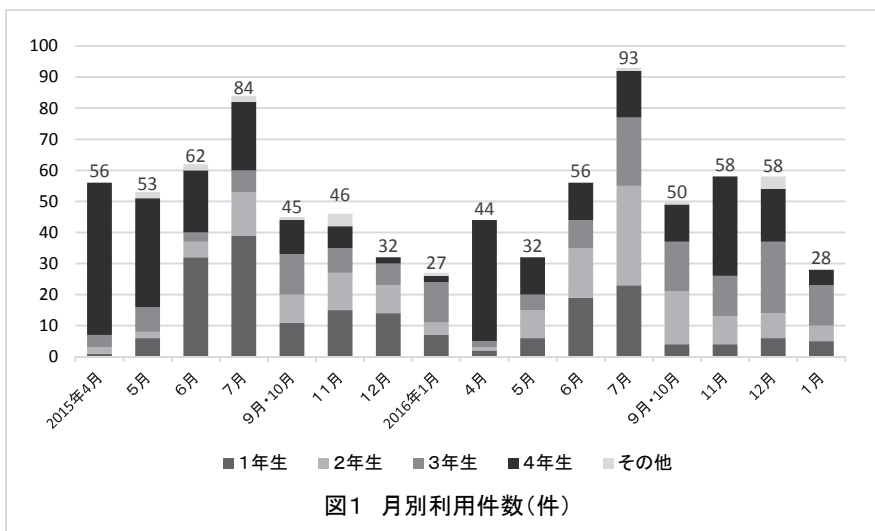
⁴ 2015年度第21回FDフォーラム第10分科会での講演とその報告集からの情報。

例年7月は利用が非常に多い(15年84件、16年93件)。これは学期末レポート、特に、基礎演習で初めてレポート作成を行う1年生の相談が急増するためである。この時期は、予約が取れず開講時間外の相談を求める学生が多く訪れる。可能な限り対応はしているが、学期末は通常よりも開室時間帯を増やすなどの対応が必要になるかも知れない。

図1から分かるように、16年度は11月、12月に4年生の利用が多くなっている。これは12月初旬締切の卒業論文・卒業制作の相談が増えたためである。15年度までは、これらの相談はあまりなかったが、研究演習担当の先生方がセンター利用を促してくださったこと、過去にセンターを利用したことのある学生が論文執筆時に再び相談に訪れるケースが出てきたことなどが相まって、16年度後期利用者増にも結びついている。

図1に示されたのべ824件全体について学年別に見ると、1年生23.5%(194件)、2年生18.7%(154件)、3年生20.1%(166件)、4年生35.4%(292件)で、1年生と4年生の利用が多い。先述したように、基礎演習、卒業論文・制作の利用者が多いことを考えると当然の結果とも言えるが、開設当初と比較して2年生、3年生の比率も増え、4学年は均等に近づいているようである。これは2、3年生が留学や奨学金関連の書類についての相談で利用することが増えていることが大きな要因となっている。

また、図には示されていないが、留学生の利用が全体の18.3%(151件)を占めている。留学生以外でも、多様な言語背景を持つ学生も一定数センターを訪れている。これは、日本語に困難を抱える学生が、レポートその他の日本語文章作成にあたって、多くの問題点に遭遇し、情緒的にも不安や自信のなさを持っていることの表れと考えることができる。グローバル化の進む現代において、まして外国語大学で様々な母語背景を持つ学生を抱える神田外語大学に設置された学習支援施設として、日本語ライティングセンターが今後彼らにどのような支援を行うことができるか、どのような役割を果たせるか、さらに考えていきたい。



3-2. 学科別利用者数

のべ利用者 824 名の所属学科は、英米語学科 286 名 (35%)、アジア言語学科 83 名 (10%)、イベロ・アメリカ学科 127 名 (15%)、国際コミュニケーション(IC) 学科 310 名 (38%)、その他 (教職員、留学生別科、大学院) 18 名 (2%) である。

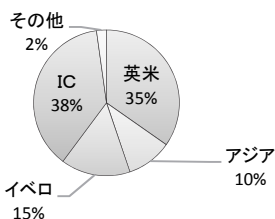


図2 学科別割合 (15前～16後の合計)

3-3. 相談内容（複数回答）

15 前期（図 3）、15 後期（図 4）、16 前期（図 5）、16 後期（図 6）の相談内容を見ていく⁵。まず、図 3 と図 5 に示す過去 2 年間の前期相談内容を見ると、兩年ともレポートについての相談が多いことが分かる（15 前 102 件、16 前 113 件）。特に、前期は 1 年生の基礎演習関連の相談が多数ある。

履歴書とエントリーシート（ES）は、15 年度よりも 16 年度のほうが少ないが、これは就職活動解禁時期が 16 年度に 8 月から 6 月に変更されたこと、キャリア教育センターでの 4 年生全員に対する個別相談が設定されたことが関係している。

また、16 年度に入り、研究演習担当の先生方がセンター利用を促して頂いたことにより、ゼミ論や卒業論文・卒業制作などの相談が急増した（15 年度 14 件、16 年度 54 件）。論文作成のためにセンターを利用する学生が増えれば、研究演習担当教員の負担が軽減され、よりセンターの存在意義も高まると考えられることから、今後、利用を促すための試みを続けていきたい。

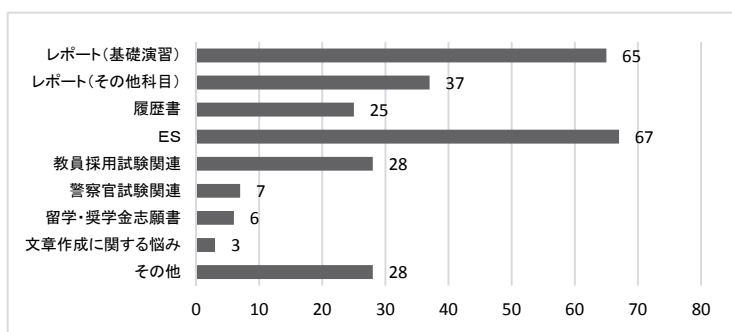


図 3 15 前期相談内容(件・複数回答)

⁵ 図 3～6 の「その他」には、就活や進学についての相談、内定・合格の報告や、広報文・企画書・ポスター・プレゼンテーションなどの原稿、外国語を日本語に翻訳した文章、国際交流基金日本語パートナー、トビタテ留学 JAPAN などの志望書などがあり、お礼状、友人との LINE のやりとりについての相談なども含まれる。

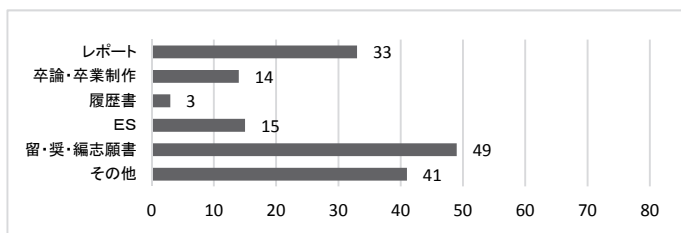


図 4 15 後期相談内容(件・複数回答)

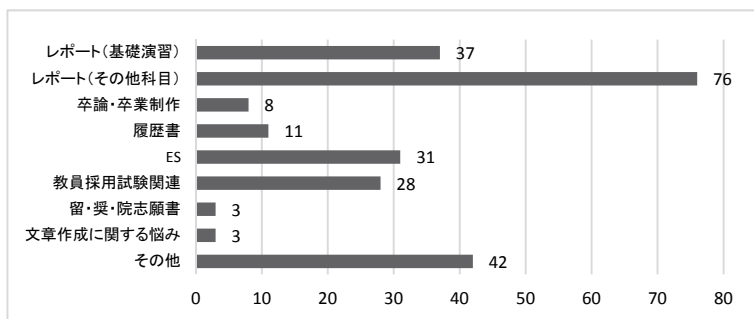


図 5 16 前期相談内容(件・複数回答)

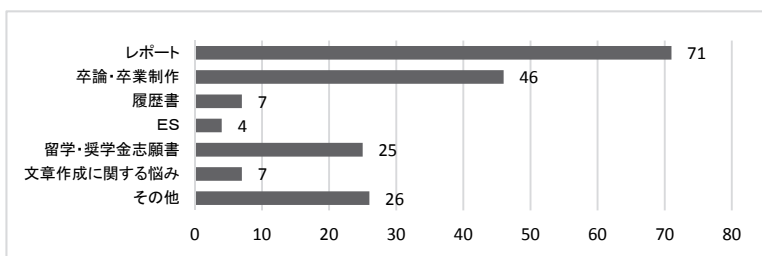


図 6 16 後期相談内容(件・複数回答)

3-4. ライティングセンターを知った方法

図7は、ライティングセンターを知った方法について、初めて来た利用者に複数選択で回答してもらった結果である。15年前期・後期、16年前期・後期の合計で、合計264件の回答があった。

教員の紹介、友人の紹介で知ったという回答が多数であることが大きな特徴である。また、図書館でセンターを直接見て知ったという回答、ポスター（センターの説明会案内やスケジュール入りポスターなど）で知ったという学生も多い⁶。これらのことから、現段階では、センター利用の最初のきっかけは、ホームページや campus web などの Web を介した情報よりも、直接目にした情報や口コミから得た情報となっているようである。次年度からは Web 予約も導入する予定であり、SNS などを通じた広報活動も取り入れることが有効であると思われるが、一方で、人を介したつながりも同様に重要であることを忘れずにいたい。

これまで7年間の図書館での活動により、センターの認知度も上がりつつあることを実感している。17年度から6号館へ移動し、よりアカデミック支援の役割を強めていくことになる日本語ライティングセンターの新たなスタートにあたり、センターの意義を理解してもらうためには、学生だけでなく、教職員のさらなる協力を得てセンターの役割を紹介していくことが必要となってくる。学生に広くセンターの役割と意義が伝わるような方法を模索する必要がある。

4. おわりに

以上、本稿では、開設7年目、常設化4年目を迎えた神田外語大学附属図書館日本語ライティングセンターのこれまでの歩みと現状について報告してきた。センターは図書館内の1室で活動する小さな組織であったが、図書館、グローバル推進室の職員の方々、担当講師の先生方、学生にセンター利用を薦めてくださる

⁶ 説明会という回答が少ないのは、説明会の案内ポスターを見て知った学生がポスターのみを回答としている可能性がある。

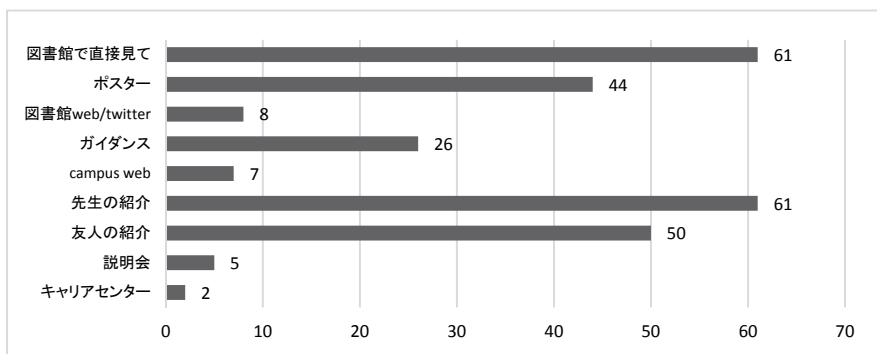


図7 センターを知った方法(15前～16後合計・初めて来た学生の複数回答)

先生方、友人にセンターの存在を広めてくれる学生たちなど、多くの方々の協力を得て、何とか7年間活動を続けてきた。17年度から、よりアカデミック支援を強化した運営を行うことになるが、この新たな出発を前にした今、今後の活動への課題と展望について、以下に述べていきたい。

まず、センターの役割や意義を教職員や学生に知らせていくためにも、ライティングセンターの理念体系を明確化し、長期的な展望を立てることが必要と考える。理念や役割を明確に提示できれば、教員や他部署とのさらなる連携を図ることができる。そうすることにより、サポートを必要としているであろう学生たち（例えば、多様な背景を持つ日本語に困難を感じている学生、授業についていくのが難しくなった学生など）に、センターの存在を知らせることができ、リメディアル的な役割も果たすことができよう。SALCのライティングセンターが開設した2003年の『言語教育研究』のAnnual Reportsには、「ライティングセンターと大学のアカデミックプログラムが慎重に統合されていかなければ、センターの利用効果が非常に限定されたものになってしまう（本稿筆者訳）」との記述があった。日本語に関しても同様で、学生のライティング力向上のためには、正規科目

のカリキュラムとライティングセンターでの支援を結びつけた上で、学生の4年間での成長も考慮しながら、方向性を検討すべきではないだろうか。これには、他大学のライティング支援施設への視察などにより情報を得ることも助けとなるだろう。

また、現在抱えている課題をより明確化し、今後のよりよい運営につなげるためには、利用者を対象としたアンケート・インタビュー調査などを行うことも必要であろう。例えば、満足度はどの程度か、開室時間帯はいつが望ましいのか、よりよい予約方法はないか、マンツーマン・ライティングの1セッションの長さは適切かなど、支援にあたって必要な情報を収集することにより、見えてくる解決策も多いだろう。

セッションについて少し述べておくと、現在は90分1コマの中で30分のセッションを最大3回行っている。そのため、担当講師がセッションの振り返りと内容の記入を時間内に行う負担が大きくなってしまっている。理想的には、セッションごとに数分、講師がシート記入に費す時間を設けたほうがよいと思われ、これについては今後の検討課題である。また、そもそもセッション自体が30分というのは短いのではと考えることもでき、時間については他大学での事例⁷も含めて、検討する必要があるだろう。今後、Web予約とともに、利用状況の記録についてもより効率的で適切なシステムを導入することが求められる。

さらに、センターでの活動に関連した実証研究を行うことも有効であろう。例えば、講師と学生の対話がライティングの質や書き手の意識にどのような効果を与えるのかを分析することも有意義であると考えられる。

ライティング能力の熟達には長い時間が必要であり、書き手が様々な知識、教養、技能、そして、論理的思考力を身につけていく過程で徐々にその力が成熟し

⁷ 例えば早稲田大学ライティングセンター、津田塾大学ライティングセンターでは1セッション45分、関西大学ライティングラボ、国際基督教大学ライティングサポートデスクは40分である。また、愛知淑徳大学ライティングサポートデスクは本学と同じ1セッション最大30分で行っている（各大学のホームページの情報から。2017年1月24日閲覧）。

ていく (井下、2008; Kellogg, 2008)。アカデミック支援という大きな課題に対して、今後日本語ライティングセンターがどのような役割を果たしていけるのか、改めて考えていきたい。

参考文献

- 飯野朋美・稲葉利江子・大原悦子、「個別相談とライティング支援の可能性—津田塾大学ライティングセンターの活動分析から—」、『津田塾大学紀要』、第 47 号、133-148 頁、2015 年。
- 井下千以子、『大学における書く力考える力—認知心理学の知見をもとに』、東信堂、2008 年。
- 佐渡島紗織、「第 1 章 チュータリングの理念」、佐渡島紗織・太田裕子編『文章チュータリングの理念と実践 早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』、2-10 頁、ひつじ書房、2013 年。
- 大学コンソーシアム京都、『2015 年度第 21 回 FD フォーラム報告集』(DVD)、2016 年。
- ボイド・J・パトリック、「第 1 節 アメリカでの発足—ライティングセンター誕生の経緯—」、佐渡島紗織・太田裕子編『文章チュータリングの理念と実践 早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』、242-248 頁、ひつじ書房、2013 年。
- Kellogg, R.T. (2008). Training writing skills: A cognitive developmental perspective. *Journal of writing research, 1*(1) 1-26.
- Research Institute of Language Studies and Language Education, Kanda University of International Studies. (2003). Annual Reports. *Studies in Linguistics and Language Teaching* (『言語教育研究』), 14, 247-315.

資料1 【表面】センターに来た学生が記入するウェルカムシート

神田外語大学附属図書館日本語ライティングセンター ウェルカムシート

相談日：2016年 ____月 ____日 学籍番号： _____ 氏名： _____

学科（専攻）：英米語学科・アジア言語学科（中国語・韓国語・インドネシア語・ベトナム語・タイ語）・
イペロアメリカ言語学科（スペイン語・ブラジルポルトガル語）・
国際コミュニケーション学科（国際コミュニケーション・国際ビジネスキャリア）・
大学院（博士前期・博士後期）・留学生別科/ES・その他（_____）

学年：1・2・3・4年生

Q1：ライティングセンターに来るのは..

初めて ・ 2回目 ・ 3回目 ・ それ以上(____回目)

⇒初めての人におたずねします。日本語ライティングセンターのように知りましたが、(あてはまるもの全て)

a) 図書館で直接 b) ポスター c) 図書館ウェブサイト
d) 図書館 twitter e) 年度初めガイダンス f) KUIS Campus Web
g) 先生の紹介 (____先生) h) 友人の紹介
i) その他 (_____)

Q2：今日相談したいとは何ですか。わかっていることを教えてください。

相談内容：レポート・論文・履歴書・ES・その他(_____)

提出先（就任人、または企業名など）： _____

* 授業名： _____

締め切り： ない ・ ある (____月____日)

制限字数： ない ・ ある (____字・____ページ)

決められた書式： ない ・ ある / PC ・ 手書き

書く段階： 構想中 ・ アウトラインができた ・ 書いている途中 ・ ほぼ完成

解決したいこと： _____

今の気持ち： _____

資料2 これまで行った講演会と対談

● 時事講演会 富澤昌美講師

第1回 2012年5月30日(水) 17:00~18:20

～社会を知ろうⅠ～ 原発、核、そしてメディア

第2回 2012年6月29日(金) 15:10~16:40

～社会を知ろうⅡ～ オリンピックの舞台裏

第3回 2012年7月27日(金) 16:50~18:20

～社会を知ろうⅢ～ Intelligence ースパイの世界

第4回 2012年12月21日(金) 16:50~18:20

～社会を知ろうⅣ～ 文化・スポーツイベントとメディア

第5回 2013年7月19日(金) 16:50~18:20

～社会を知ろうⅤ～ ニュースの裏側

第6回 日時:2014年7月16日(水) 15:10~16:40

～社会を知ろうⅥ～ ニュースを読み解く

● 対談 富澤昌美講師、西菜穂子講師 司会・進行 磯部俊哉 (IC学科3年・当時)

日本語ライティング トークセッション

～そこが知りたい!日本語ライティングのコツ～

日時:2015年7月8日(水) 12:20~13:00